戦国領主と城郭

千田嘉博

はじめに

本稿は新しい戦国期城郭研究を構築するための戦略と、それを実行するためのいくつかの分析視角の整理を試みた。この結果、城郭研究は考古学的研究方法をさらに取り入れ、これまでの成果を戦略的に分析・分類する必要があることを示した。それは以下のようなプロセスをとる。

①地域に存在した多様な城郭群を把握する。②そのなかの拠点城郭（戦国期にあっては戦国期拠点城郭）を抽出し、中心地形成分析などとともに特色を理解する。③そうして把握した地域ごとの城郭群のまとまりの特色を類型化して分類する。④城郭群のまとまりは時期ごとに変化するので、地域の城郭群のネットワークを静的にではなく動的な変遷過程として把握する。⑤その城郭ネットワークの変遷過程そのものも類型的に整理してつかむ。⑥戦国期社会とその変遷を、地域の城郭ネットワークのあり方と、地域の城郭ネットワークがどのように変化したかの変遷そのものの類型的把握から理解する。

戦国期社会を分析する資料として戦国期城郭跡を活用していくためには、上記した城郭跡そのものの分析を深化させる必要があるが、さらにそうした評価を文献史学からの分析成果をも勘案しつつ総合的に評価していくことが求められる。城郭研究は遺構・遺物にもとづいた物質資料研究であるから、第１段階のモノ資料研究としての分析を究めた上で、次の段階において文献史学をはじめとする関連諸学の成果との比較検証を行い、より高次な評価に進むという研究プロセスとなる。この第２段階の比較検証段階は関連分野の研究者間の相互分析が可能である。だから考古学研究者や城郭研究者が文献史学の研究を勘案することも、またその逆もできる。

本稿では第１段階の城郭構造研究を深める視点のひとつとして戦いと城郭・防御施設を取り上げた。この結果、中世の城郭研究だけでなく考古学からの戦争研究は、これまで信じられてきたほどリアルな状況をつかんだ上で議論していたのではなく、論点や評価の基礎そのものに物質資料研究としての特質を踏まえた再検討が不可欠であることを指摘した。

つぎに筆者が、城郭構造研究から提唱した戦国期拠点城郭（千田1994、のち千田2000ａ）が、文献史学から提唱されている「戦国領主」と具体的にどのように関わるかを検討した。この結果、戦国期拠点城郭は、大名の拠点としてだけではなく、戦国領主の拠点としても共有されており、戦国領主の城郭は大名による戦国期拠点城郭のミニチュア的存在であったと評価できた。大名領の内部には細胞の核のように戦国領主による戦国期拠点城郭が分立し、判物を発給して一定の排他性を備えた領の中心として機能したのである。隣接した領をもった戦国領主が必ずしも友好的関係とは限らず、係争地であった境目には軍事機能を卓越させた城郭が出現した。このように物質資料研究の成果を文献史学の研究成果と勘案することで、地域における多様な城郭の分布の歴史的意味を読み解けるのである。

1. 城郭・防御施設と戦い

（1）戦いをどう把握するのか

城郭プランの変化をどのように評価するかは、城郭研究において重要な課題である。いわゆる縄張りとして把握される城郭プランの進化が防御機能の進化と表裏の関係であったとすれば、その正しい把握には城郭をめぐって行われた戦いを正しく捉えなくてはならない。もちろんそれは実際に行われたものだけでなく、築城主体がどのように戦いを想定し、それ故に城や防御施設がある形態になったのか、そして戦いに備えた城や防御施設が果たした象徴性などをも含んだ把握である。

城跡と戦いについては発掘調査で城跡の面的な調査が重ねられることで、地表面観察では及ばないリアルな成果が得られるとされてきた。しかし多くの城跡は落城時や改修時・廃城時に取り片付けを受けた。これまでそれを充分意識して評価してきただろうか。たとえその城跡が実際の戦場になって激しい攻防戦が行われたとしても、その痕跡が戦場となった城跡にそのまま残ることは基本的になかった。そうした戦場遺跡の物質資料としての特性に留意しなくては、正しい解釈はできない。

考古学研究者であれ文献史学者であれ、戦国期に城をめぐる戦いがなかったと想定することはまずないが、それは数多くの文字史料によって戦いがあったことがあらかじめ理解されているからである。しかし発掘された城跡から殺傷人骨や武器・武具が出土することはまれ、もしくはわずかである。つまり物質資料からは戦場であった城跡を発掘しても、戦いの実像を直接把握したり復原したりするのはやさしくないのである。

だからたとえば文字史料がほとんど存在しない弥生時代の戦いをどのように捉えるのかは、たいへん困難な課題といえる。環濠集落や高地性集落などの評価では、武器の出土状況が問題になる。しかし単純な共伴の有無を指標にして評価することは、発掘による戦国期城郭の武器出土の様相と対比すれば、再検討の余地がある。

（2）原城における戦場遺跡

リアルな、それ故に救いのない城郭攻防の戦場が遺跡として出土したのは、1637年12月から1638年２月にかけて起きた島原の乱の主戦場となった原城だけといってよい。原城本丸の外枡形にかかわる南島原市教育委員会の発掘によって、1638年２月27・28日に実行された幕府軍の総攻撃による一揆軍のおびただしい戦死者が発掘された。遺体には刀によりえぐられた大腿骨、刀ですねあるいは腹部を切断された人骨、頭部を切断された人骨、首より下の部位と切断された頭骨が折り重なって発見された。長崎大学の分部氏の分析によれば、人骨には老人男女、壮年・青年男女、子供があり、無差別に籠城した一揆の人びとが殺害されたことがわかる（写真１・２）。

写真１　原城本丸外枡形で見つかった折り重なった殺傷人骨（関節がつながっている）

これらの人骨は腐敗が進むと最初に分離する関節の部位が接合した状態で検出されているので、長く放置された末に埋没したのではない。また文字史料から幕府軍は落城の翌々日に原城の石垣を破却させたことが確認できるので、崩された石垣石材の直下から検出されたこれら人骨は、二次的な死体の遺棄状況を示すのではなく、落城さなかの最終的な殺りく現場の状況そのものにきわめて近いものと位置づけられる（千田2008・2009）。

直視をはばかられるおびただしい殺傷人骨は、城郭をめぐる戦いの容赦のない残忍さをまざまざと語りかける。落城の形態にもいろいろあり、すべての落城がこのよう

な文字通りの殺りくを伴うものではなかったにせよ、最終的な攻城・防衛段階では、衝撃武器が圧倒的な役割を果たしたことを示す。松木武彦はK.オッターバインの攻撃具の分類を援用しつつ弥生時代の衝撃武器（刀・槍など）と投射武器（弓矢・つぶてなど）の分析を行っているが（松木2007）、原城例は戦闘の推移と武器の使い分けを実証的に把握できる希有な例である。

原城からは膨大な鉄砲の弾丸、大砲の砲弾が出土している。これは衝撃武器による戦闘の前に投射武器を主体とした戦闘があったことを示す。事実、文字史料ではおよそ3ヵ月におよんだ籠城戦の大部分で大砲と火縄銃による両軍の射撃戦が戦いの主体であったことがわかる。つまり原城の攻防戦では投射武器を主体とした戦闘から、城内乗り入りを経た決戦段階になって衝撃武器を主体とした戦闘へと移行し、最終的な勝敗が決したことを物質資料から具体的に復原できたのである。

このような戦闘プロセスを発掘調査から実証的に直接証明できた意義はきわめて大きい。幕府軍が石垣を崩して遺体を埋めて処置したことで原城攻防戦の戦場遺跡は残された。そうした特殊な遺跡化の過程を経なかったほとんどの城跡では、記録から分かる攻防戦の実像を遺跡から読み解く手がかりの多くは失われている。堀や土塁、石垣や櫓はそもそも戦いに備えたものであったが、それが実戦で使われたのか否か、役だったのか否かの証明はたいへん難しい。

写真2　原城本丸外枡形で見つかった折り重なった殺傷人骨（頭部が切断されている）

しばしば城郭遺構の評価で、「この程度の堀では機能しなかった」と断じたものを散見するが、その基準は詳らかでない。城や防御施設は小集団間の争いから大名間の争いまでさまざまな戦いに備えて築かれたのだから、たとえ小規模なものでもそれが機能し得た戦いを想定して評価しなければ、遺構の評価そのものの根幹を見誤ることになる。もとより堀や土塁・石垣、天守や櫓、城門などの施設は、直接的な軍事機能の発揮だけでなく、築城主体の権力の象徴性や権威の表象性を備えた。だからそれらを軍事的な機能だけで評価してはならないが、象徴性や表象性も基底としての軍事機能があればこそ、その効能を発揮し得た（それはたとえばギリシャ・クノッソス宮殿のダブルアックスのような武器形祭器の成立とも共通した）。象徴性や表象性を評価するにも前提としての（あるいは前提として想定され、仮託された）軍事機能を正しく理解することが重要である。

2. 戦国期拠点城郭と戦国領主

（1）城郭研究から考える中世社会

日本の近世城郭は16世紀第4四半期に原型が成立し、17世紀第1四半期にもっとも複雑化した。16世紀第3四半期までは日本列島の拠点城郭（戦国期拠点城郭）はそれぞれの地域性を色濃く備えた。そうした戦国期拠点城郭のプランに表れた地域性は、築城主体であった権力構造の特質の反映であった。そうした地域性は巨視的に見れば城郭構造の求心・階層的構造を指向したものと、並立的な城郭構造を指向したものとに区分される（千田1990、のち2000a）。

筆者はそうした城郭の曲輪連結パターンの求心構造と並立構造が、築城主体の築城技能の善し悪しではなく、権力構造に由来することを論証してきた（千田1994・2003）。このなかではあらかじめ文献史学から築城主体の権力構

造の検討が進んだ事例を取り上げた（たとえば相良氏など）。これは城郭構造からの築城主体の権力構造研究の妥当性を検証するためであった。そうした検証を抜きにしては、遺跡はあっても充分な文字史料に恵まれていない多くの城跡の構造分析成果の妥当性を担保できないからである。

しかしそうした拠点城郭を把握しただけでは、戦国後期城郭の理解は充分でない。戦国期拠点城郭の地域性が築城主体の権力の特性の反映であったように、地域に存在したさまざまな築城主体によって建造された城郭群も、またそれぞれの築城主体の権力の特性を反映していくつかのタイプに区分し得る形態をとったからである。

つまり大名や国人領主、村落領主、領主連合、都市・村の共同体、寺社といったさまざまな築城主体のそれぞれの城郭がどのような組み合わせでその地域に存在したのかということを解明しなければ、戦国期城郭を理解したことにはならない。別言すれば、どのような城郭のネットワークによって地域が構成されたのかをつかむことが必要なのである。

そうした多様な城郭プランの組み合わせそのものも、いくつかのパターンに分類・整理することができるはずである。またその組み合わせは当然ながら静的なものではなく動的なものであったから、それぞれの変容プロセスもまた、いくつかに分類して、多様な城郭群の変遷プロセスの類型的理解によって戦国後期社会の変遷を理解し、その総体として日本の戦国期社会を分析する城郭研究が確立できるはずである。

現在、城郭研究は多くの研究者によって担われており、とりわけ民間学としての城郭研究が考古学や文献史学からの研究分野と並んで大きな位置を占めていることは、特筆すべき特徴である。そうしたなかで個別の城郭プランの把握や発掘成果は着実に蓄積されているが、城郭遺跡そのものからどのように歴史を解明していくか、にかかわる研究戦略は充分ではない。

それは多様な城郭群の動的な変遷プロセスを類型的に把握するというかたちでこれまで蓄積されてきた成果を分析し、理論化することを意味する。その意味でいわゆる城郭研究は、すぐれて考古学研究の方法にもとづいて進めていく必要があるといえよう。

（2）戦国期城郭の類型的把握と戦国領主による領形成

先に検討したように戦国－織豊期には地域ごとの城郭構造に共通性が認められ、ある地域においてまとまりのある城郭群を構成していた。このような地域ごとの城郭構造の特色は、14世紀代には明確でなかった。14世紀代の城郭は山城では基本的に堀切りが未発達であり、切岸による人工急斜面の段を主たる防御施設とした（千田2000b）。そうした城郭構造は城郭として転用された山岳寺院にも共通し、また地理的にも地域的特色というより全国的普遍性をもった時代的な特徴と評価すべきである（千田2008）。

つまり中世城郭の地域的特性は15世紀から16世紀の室町・戦国期、とりわけ15世紀末から16世紀中頃にかけて顕著になったのであり、それを戦国期の権力および社会構造の特質を反映した変化と捉えることができる。当該期については文献史学の研究から、戦国大名の公権力形成や「戦国領主」の分析が進展している。矢田俊文は戦国領主を、①独自の「家中」および「領」をもち、②判物を発給して一円的・排他的支配を行った戦国期の基本的領主と定義している（矢田1979・1982）。

発給文書から石見国西部を中心とした戦国領主の領の形成を分析した村井良介によると、15世紀末から16世紀中頃にかけて所領表記は、職や権益ごとの記載が消え、地名で一括されるようになった。これは庶家や他氏の被官化・排除などにより、個別所領単位での支配の一元化が強まった表れとされた（村井2008）。

このように戦国期における領域的支配の展開を把握できるとすれば、戦国期拠点城郭はまさに大名分国と、その分国内の戦国領主の領の成立を基礎にして成立したと位置づけられる。村井氏が文書から分析された石見西部地域の戦国領主の拠点を具体的に検証してみよう。

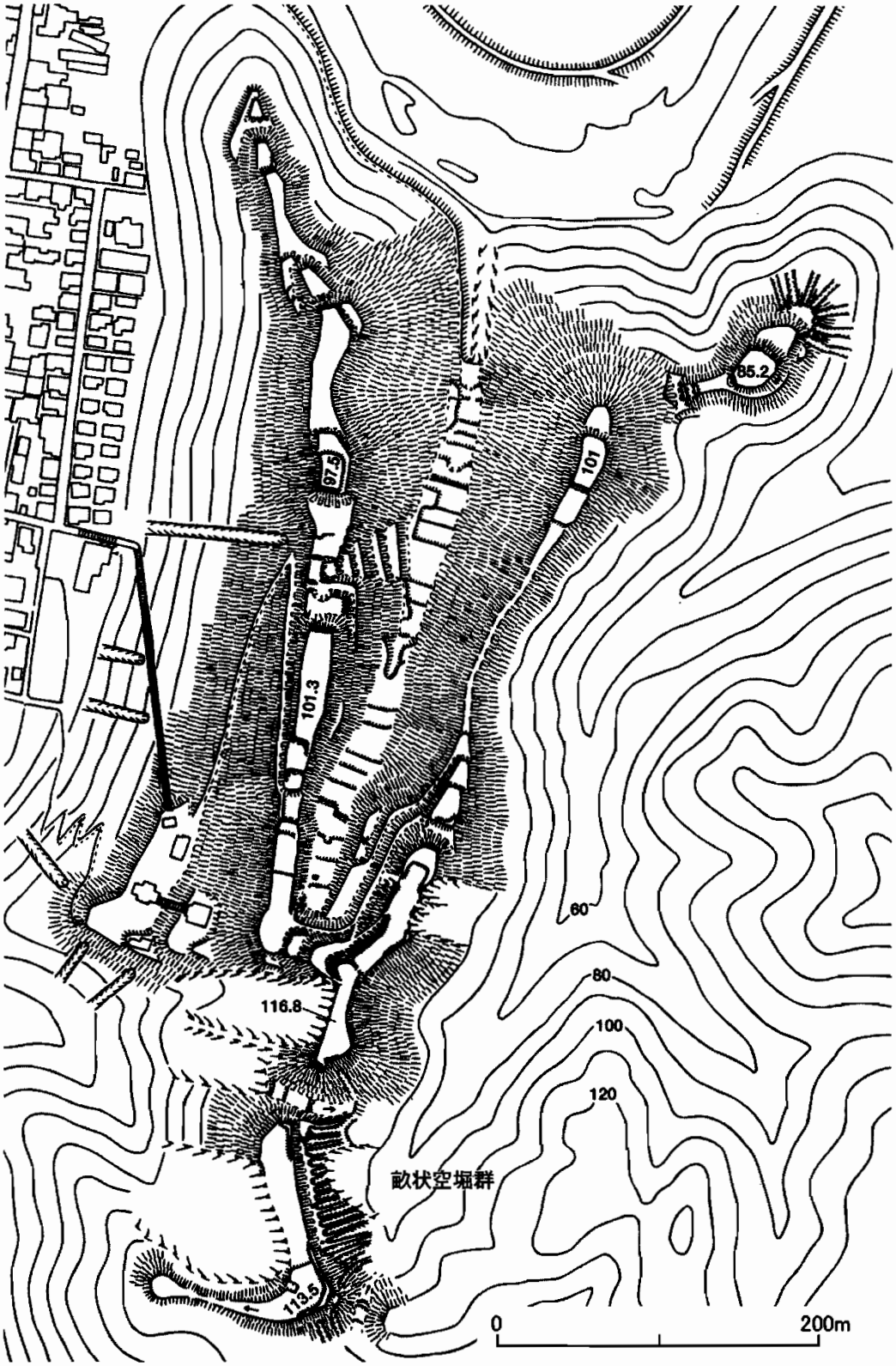

図１　益田氏の七尾城（錦田編1997所収図に加筆）

この地域の戦国領主の代表として益田氏と吉見氏をあげることができる。益田氏は14世紀から16世紀中頃まで現在の島根県益田市にあった平地居館・三宅御土居を拠点にした。しかし16世紀後半には山城の七尾城に拠点を移し、山上の城に居住し戦国領主として領域を支配した（図１）。七尾城は全長700mにおよんだ大規模な山城で、地表面観察と発掘成果から山城内に礎石建ちの御殿をもち、要所に瓦葺きの櫓や櫓門を備え、帯曲輪には大規模な多聞櫓

が建っていたことが判明している。さらに戦国期の山城において防御機能の強化に用いられた畝状空堀群を配していた（木原編1998、千田1998）。

畝状空堀群は竪堀と土塁を曲輪外縁の斜面に築き並べた防御施設で、東北から南九州まで分布を確認できる。石見西部地域でも畝状空堀群は戦国期に盛行した（錦田編1997）。つまり戦国領主・益田氏の戦国後期の拠点であった七尾城は、城郭構造から軍事的機能に城主や家臣の生活・政治機能を統合した典型的な戦国期拠点城郭であったと評価できる。

益田氏と領域を争った吉見氏は現在の津和野町にあった津和野城を本拠にした。津和野城は近世初頭に坂崎氏が

図２　吉見氏の津和野城（錦田編1997所収図に加筆）

入って倭城そのままのプランを取り入れた織豊系城郭に中心部を改修した。しかし石垣づくりとなった本丸などを除き、周辺部には吉見氏時代の土づくりの戦国期城郭が良好に残されている。吉見氏時代の津和野城は1000mにもおよぶ城域をもち、要所の堀切りや土塁だけでなく、畝状空堀群を配置して守りを固めたことが地表面観察から確認される（図２）。本丸周辺は近世城郭へ改変されたので戦国期の様相は詳らかでない。しかし戦国期の本丸も近世の津和野城本丸の位置と考えられ、一定の曲輪面積をもったと推定されるから、益田氏の七尾城と同様に山城内に殿舎が建ち、軍事機能と生活・政治機能を統合した戦国期拠点城郭だったと考えてよい。

このように戦国大名毛利氏に服属しつつ毛利分国内に一円的・排他的な領域支配を行っていた益田氏と吉見氏は、毛利氏の戦国期拠点城郭であった吉田郡山城と比べて集積度や規模では劣ったものの同様の機能を果たし、たがいに拮抗した戦国期拠点城郭を本拠としたことが明らかである。詳しくは述べないが、益田氏領の北東に小規模ながら一円的な領をもった周布氏の拠点・鳶巣山城（島根県浜田市）も、規模は七尾城、津和野城におよばなかったが、居住可能な曲輪を多数備え念入りな畝状空堀群を配置しており、やはり戦国期拠点城郭と評価してよい。

戦国期拠点城郭の概念は戦国期城郭において特徴的に出現した城郭の構造特色を城郭構造の分析から導き出したものであった。そうした物質資料研究からの成果を文字史料からの分析と比較検討することで、戦国期拠点城郭は戦国領主の一円的・排他的な領域的支配の成立を基盤に、その拠点として出現したと位置づけることが可能になった。そして戦国期の大名分国が直轄地としての大名領と、戦国領主の領との分立的な構造で構成されたことに対応して、分国内には大名による戦国期拠点城郭だけでなく、戦国領主による多数の戦国期拠点城郭が拮抗しつつ存在したと理解されるのである。だから戦国期拠点城郭の構造と分布は、まさに戦国期の大名と戦国領主による地域社会の領域支配の特色を物語るものといえる。

戦国領主の領との関わりで城郭を読み解くのは拠点城郭には限らない。たとえば村井氏によれば益田氏と吉見氏との係争地として澄河があった。ここは現在の島根県匹見町澄川にあたる。匹見川の渓谷に添った谷間の地域であり、いくつかの小規模城郭も知られるが特筆されるものではない。しかし匹見川が流れ下り、高津川と合流した先には城域外周に畝状空堀群を張りめぐらして強力な軍事拠点機能をもった角井城が存在した（島根県益田市須子町）。角井城自体が七尾城のミニチュアのような構造をもったが、畝状空堀群による軍事機能の強化は尋常ではない（図３）。

ふつうなら城主が戦国期に防御力を強化した改修を行った、と評価することになるだろう。しかし先に見てきた益田氏と吉見氏との領をめぐる争いを考えると、益田氏がどのように軍事的侵攻から領域を守ろうとしたか、という視点から位置づけるべき城といえよう。すると大名による戦国領主の拠点城郭の支城化、という動きだけでなく、戦国領主による軍事拠点の支城化もしくは選択的軍事機能強化といった動きも城郭構造の分析から見られることになる。つまり大名による戦国領主の戦

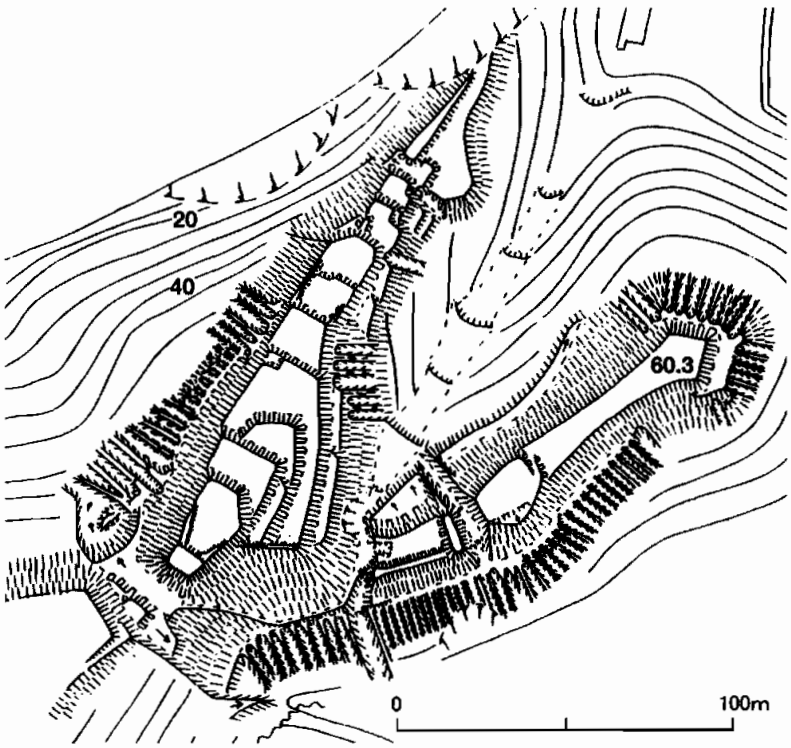

図３　畝状空堀群をめぐらした角井城（錦田1997所収図に加筆）

国期拠点城郭の支城化と同様な志向が、戦国領主の城郭政策の中にも相似的に行われたといえる。大名と戦国領主の居城であった戦国期拠点城郭はすでに述べたように相似的な構造をもったが、領域内の要所の城郭の編成も同様な性格を指摘できる。

おわりに

物質資料研究からどのように中世社会を明らかにしていくかには、いくつもの方法がある。土器や陶磁器を分類・編年して様式的に把握するのもすぐれた研究方法である。しかしこうした成果を活かして歴史を論じていくとき、それらが使用された空間のなかでの組み合わせを意識した評価が必要だと考えている。

筆者は以前、城郭研究も建物空間と遺物の組み合わせ、曲輪のなかでの空地と建物との組み合わせ、城郭全体のなかでの曲輪と曲輪の組み合わせ、城郭と城下との空間的な組み合わせ・・・など、空間のフレームが違うごとにそれぞれ読み取れる歴史情報が異なり、そうした空間を指向した研究の積み重ねによって物質資料研究と絵図・地図、文献史料研究を統合すべきだとした（千田2000a）。

本稿は、第１段階のモノ資料研究そのものを深化させる視点の提示として、城郭研究では自明のことのようにされてきた戦いとの関わりを検討した。この結果、戦いの物質的痕跡は失われやすく、城郭や防御施設と戦いとの関係は中世に限らず慎重に考えるべきであるとした。つぎに物質資料研究によって導かれた戦国期拠点城郭の特質をさらに分析し、歴史を叙述していくために、文字史料研究によって導かれた戦国領主の領という空間と具体的に組み合わせた検討を行った。この結果、戦国領主の領の展開と戦国期拠点城郭・領内の城郭の分布や特色が密接に関わったことを示した。

引用・参考文献

木原　光編　1998『七尾城跡・三宅御土居跡－益田氏関連遺跡群発掘調査報告書』益田市教育委員会。

千田嘉博　1990「戦国期城郭・城下町の構造と地域性」『ヒストリア』第129号、大阪歴史学会。

千田嘉博　1994「戦国期の城下町プランと大名権力」『守護所から戦国城下へ』日本考古学協会編、日本考古学協会・新潟大会報告、名著出版。

千田嘉博　1998「七尾城・三宅御土居の構造」木原光編『七尾城跡・三宅御土居跡－益田氏関連遺跡群発掘調査報告書』益田市教育委員会。

千田嘉博　2000a『織豊系城郭の形成』東京大学出版会。

千田嘉博　2000b「城郭防御の発達」『考古学による日本歴史』第６巻、雄山閣。

千田嘉博　2003「南九州における戦国・織豊期城下町と権力」『国立歴史民俗博物館研究報告』第103集。

千田嘉博　2008「考古学から見た城と戦い」『軍記と語り物』第44号。

千田嘉博　2009「城郭と戦争の考古学」2009年度 史学研究会例会報告。

錦田剛志編　1997『石見の城館跡』島根県中近世城館跡分布調査報告書・第１巻、島根県教育委員会。

松木武彦　2007『日本列島の戦争と初期国家形成』東京大学出版会。

村田良介　2009「戦国期における領域的支配の展開と権力構造」『日本史研究』第558号。

矢田俊文　1979「戦国期甲斐国の権力構造」『日本史研究』第201号。

矢田俊文　1982「戦国期毛利権力における家来の成立」『ヒストリア』第95号。